2016年度 防災教育チャレンジプラン
平成29年2月18日　活動報告

大人たちから子どもたちへ
子どもたちから大人たちへ
今伝えたいこと

大島町立小学校
（つばき小学校・さくら小学校・つつじ小学校）

代 表　大島町教育委員会　山田 三正

1986年11月15日～22日　全島避難

現状と課題

* 1986年噴火から今年で30年
  （1777年大規模噴火からは239年経過）
* 30年の歳月の経過 ⇒ 噴火災害経験・史料の風化
  （噴火当時は幼少期、または噴火経験のない保護者の増加）
* 社会構造の変化 ⇒ 緊急時の初動対応の困難性増加
  （人口減少・高齢化・単独世帯増加・地域コミュニティの希薄化等）

過去に学ぶ機会が刻一刻と失われつつあるとともに、
過去の知見や既存の防災対策が
次世代に十分に活かしきれない可能性が危惧される

本チャレンジプラン

大人たちから子どもたちへ、
子どもたちから大人たちへ
今伝えたいこと

本チャレンジプラン ねらい

■全小学 学年児童が・・・

「発 て

■

調 などの取 って、

防災意識向上の相互作用を促しながら

災害体験・災害教訓を次世代に持続的に継承する

島ぐるみで

継 続

2016年の活動計画

①事前学習会の実施

②聞き取り調査準備

③聞き取り調査の実施

④聞き取り調査結果のとりまとめ

⑤壁新聞製作

⑥校内発表会の実施

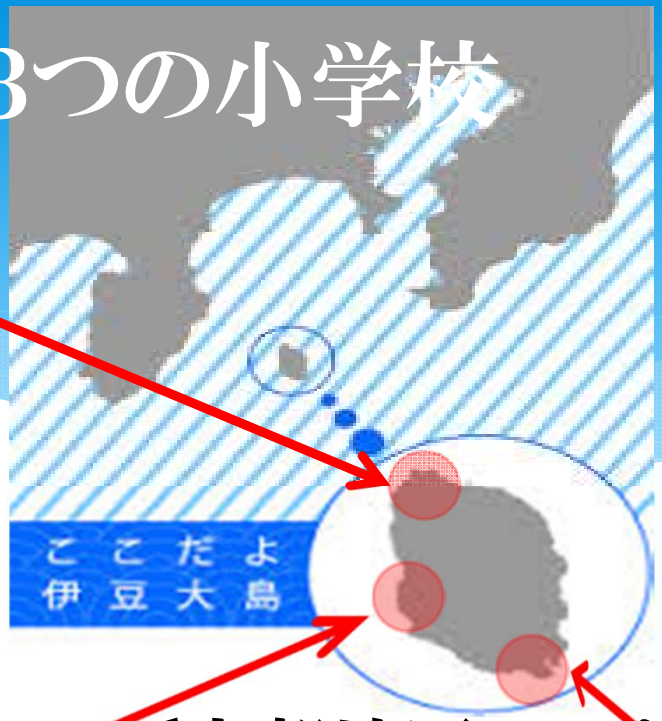
⑦島内巡回展の実施

⑧「噴火30周年シンポジウム」での発表

⑨小冊子製作・配布

⑩今後に向けた企画会議の実施

取り組み　島内全3つの小学校



〔北部地区 さくら小〕

〔中部地区 つばき小〕

〔南部地区 つつじ小〕

老人会・消防団からの聞き取り

火山博物館で
気象庁火山防災連絡事務所の方から

町防災対策室からの聞き取り

地域での実習

夏休み　身近な人へのインタビュー

・夏休み身近な人にインタビュー
・１９８６年噴火の経験を話してください。

・島の人は互いに良く助け合いをしていて、自然にやっていた。
・噴火の時は自然のすごさを感じた。

○多くの人がスポーツセンターに避難し学校にいきましたが、環境になれなくて学校を休みました。

火口だけでなくどこから噴火するかわからない事をしりました。災害の時は色々な情報が飛び交うので何が本当か焦らず落ち着いて判断することが大切で。

中３の時噴火を経験して夜中に山頂に見に行った。学校にいるときに大噴火になり、野増まで歩いて帰った。東京に避難するときは、バスで波浮港にいき漁船で元町港に戻り海上保安庁の船に乗って避難した。

避難する前は「さくら株」がもえたとか大島高校まで溶岩が流れてきたとか噂が流れて、大きくなっても大島高校に通えないんだなーと思った。

学校に行っている時に三原山が噴火をして大きい地震があり下校の指示があった。祖父母が心配だったので家族で集まり一次避難して、その後島外避難をした。

○野増の消防団だった。その日は外輪山の草刈りだったが、空振や噴石が飛んできて中止になった。噴火したら住民を野増小学校に避難させて、危険になり波浮の漁船が大型船に運んで避難させた。自分たちは最後の自衛隊の艦で避難したが、ガソリンスタンドを開けるのに２日後に戻ってきた。

・夏休み身近な人にインタビュー
・児童の感想

・経験を聞いて大変だったなと感じた。これからの調べに生かしたい
・３０年前は生まれていなかったけれど、インタビューをして調べてみて大島中の人が避難するような大変な噴火があったんだと改めて思った。

・私はおじいちゃんやおばあちゃんの話を聞いて、３０年前のその前の噴火まで聞いた。その時は表砂漠が半分以上溶岩で埋まったそうだ。やっぱり噴火は止めることはできないけれど、噴火だけは起きなければいいなと言っていたので、改めて大島が好きなんだと思いました。授業で情報のことなど調べたいです。

いろいろな災害があり今も苦しい生活が続いているところもある。噴火があった時は、避難や対処ができるように頑張ろうと思う。

学校の先生は子供を守るけど、村の人たちは消防団婦人会など助け合っている人たちが寝たきりの人を助けたりしていた。普段から助け合うことが大切だと思った。

いつ噴火してもいいように避難準備をしておくことが大切だとおもった。初めて全島避難の事を聞いて、当時は情報も少なく噂を頼りにして、避難したことを聞いて驚きました。特に波浮の港が危ないといわれ元町ににげたことが印象的でした。理由は、最初は野増が危ないから波浮の漁船で救助の船で避難したのに次は波浮が危ないとなって元町に逃げてきたと聞いて、今では考えられないほど大変だったと思ったからです。

３０年前は生まれていなかったけれど、インタビューをして調べてみて大島中の人が避難するような大変な噴火があったんだと改めて思った。

町イベントにおける　壁新聞掲示発表

大島町総合防災訓練

町　伊豆大島噴火30周年シンポジウム

噴火に備えて

助け合

当時の助け合い

当時は、防災無線が少なく、情報が行きわたらない地域もありました。だけど、消防団などがかけつけて知らせたり近所の人達の協力で死者を0人にすることができました。またひなん所では、服、食料、水、赤ちゃん用品などを配給してくれたり元気のない人に声をかけたりして元気をとりもどしたり色々な助け合いをしていました。

当時…約7日
今…約2日

噴火の前から私たちにできる助け合い

ふだんから町の人の手伝いをしたり、お年よりやしょう害がある方とふれ合ったり私たちにでもできる助け合いはたくさんあります。ふだんから助け合うことはとても大切なことです。

助け合いをふだんから意識しましょう。

私達はこう考える!!

あ　あせらない

き　協力する

お　思いやり親切

そ　備える

し　指示を聞く

（おかしものように）

を守って避難するようにしましょう!!

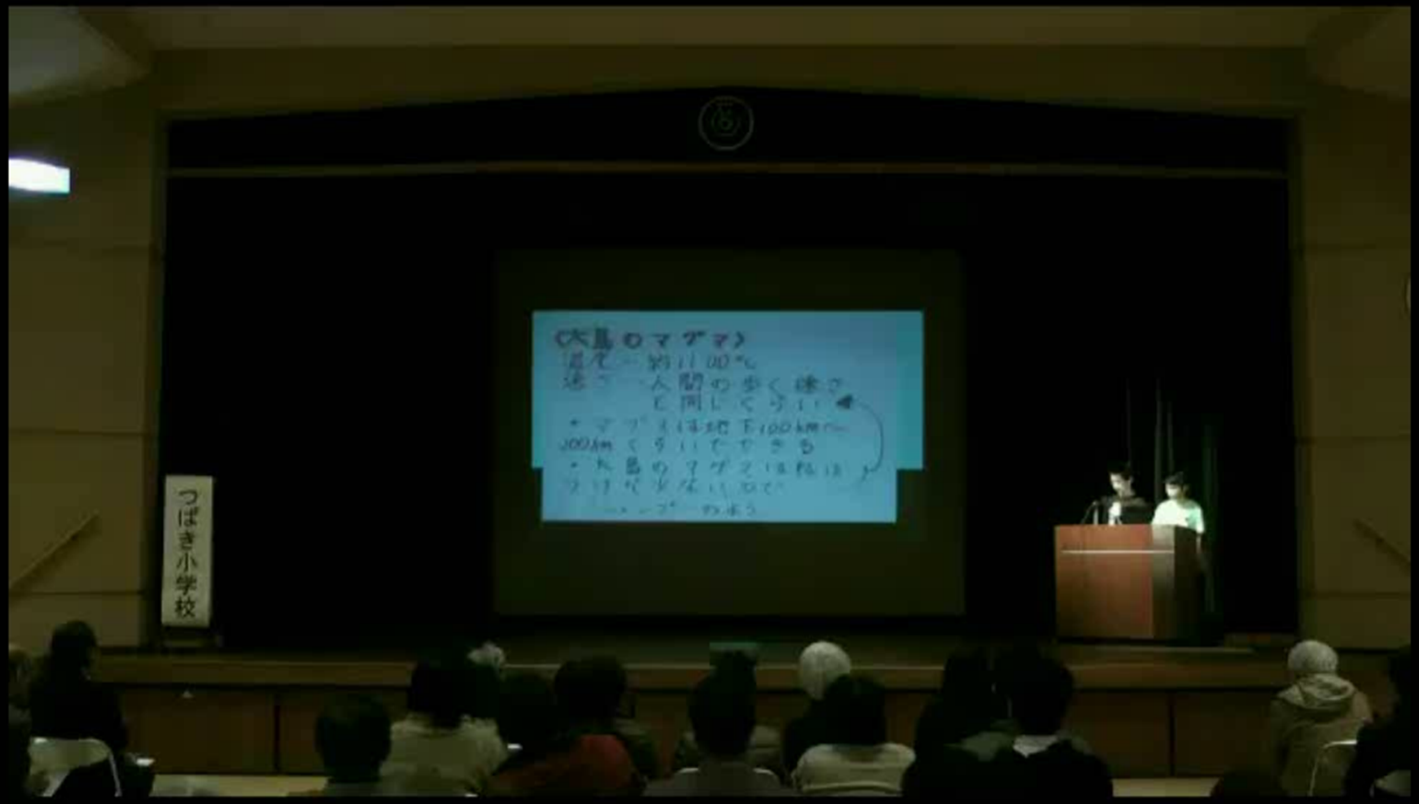
あせらないでしっかり指示を聞いて避難し、避難所では親切な心をもって生活しましょう。情報は大切なものです。しっかり指示を聞いて避難をすることが大切です。可能性があります。だから学校の避難訓練でも放送「何が起きた」「どこに避難するのか」をしっかりと聞いてください。テレビ（放送）（無線）（ラジオ）（携帯）（インターネット）などを使用して情報を受け取って適切な行動をしましょう。

ラジオは有効な情報源になる

ラジオは有効な情報源になる。町広報車などが正確な情報を伝えるのが必要です。やっぱり

町　伊豆大島噴火30周年シンポジウム　講演
～伊豆大島火山噴火の特徴と防災について～

伊豆大島噴火30周年シンポジウム
小学生の発表



子どもたちの伝えたい事

* 伊豆大島火山を知ろう
* 避難準備をしよう
* 合言葉は「あきおそし」
* 普段からの　ふれあいを密にしよう
* 噴火防災を伝えよう

噴火防災　合言葉

あ・き・お・そ・し

●あせらないでしっかり指示を聞く。

●避難所では親切な心を持って生活する。

●正確な情報を受け取って
適切な行動をして自分達の身の安全を守る。

避難について　＜正しく安全に避難＞

30年前は
バスが38台

↓

現在は19台

当時のバス

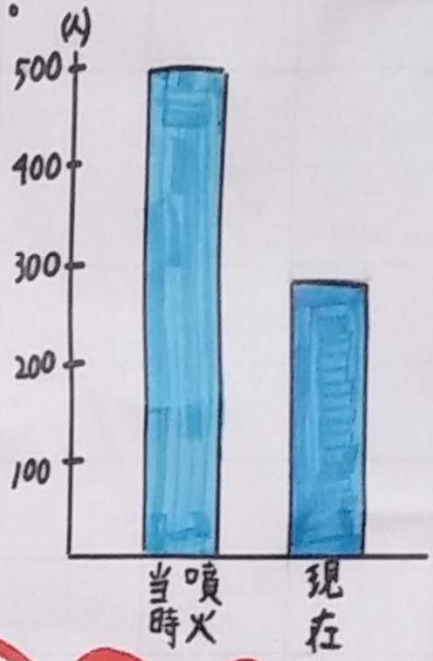
自家用車をつかうことを検討中

消防団は
約２００人
減ったよ

消防団の人たち

消防団の人たちはひなんゆう導を主にしました。他にも外輪山の木を切って山火事をふせいだりみんながひなんしても大島にのこってかい主がひなんして1人ぼっちになってしまった犬の世話などをしていました。

このグラフを見て分かるように昔は500人いたのが今では300人ほどに減っているそうです。



今後の課題解決に

◎次年度以降の継続のために、

➡ 教育課程に防災教育の充実

◎教員のスキルアップのために

➡ 防災教育研修会の開催

◎関係諸機関との連携強化のために

➡ 伊豆大島ジオパーク推進委員会

大島町立つばき・さくら・つつじ小学校
2016　防災教育チャレンジプラン
ありがとうございました